

近年における急性扁桃炎の細菌検出状況

森 淳 岸 本 厚 酒 井 正 喜 西 村 忠 郎

藤田保健衛生大学第2教育病院耳鼻咽喉科

A Study on Bacteria Detected from Acute Tonsillitis

Jun MORI, Atsushi KISHIMOTO, Masaki SAKAI, Tadao NISHIMURA

Fujita Health University The Second Affiliated Hospital

Our cases consisted 279 patients who were hospitalized in our clinic in 1989, 1993, 1995.

Some sort of bacteria were detected in all cases, and these consisted of 315 strains.

The most commonly detected bacteria was *S. pyogenes*.

S. aureus was tolerant to SBPC. Two strains of MRSA were detected.

Many PISP were detected and tolerant to CCL.

はじめに

上気道炎のなかで急性扁桃炎の占める割合は依然として高く、深頸部膿瘍などに進展し重篤な経過をたどることも稀ではない。

そのためには起炎菌の把握と適切な抗生剤の選択が重要である。

今回我々は、急性扁桃炎の細菌検出状況について検討を加えたので報告する。

対象および方法

1989年、1993年、1995年、に当科を受診した急性扁桃炎患者のうち、細菌検査を施行した279名より検出された検出菌315株で、それぞれの症例について扁桃陰窩より検体採取用綿棒にて検体を採取した。その後中央検査室へ移送し培養同定した。また、薬剤感受性試験は1濃度ディスク法にて判定した。

結 果

検出菌は、*Streptococcus pyogenes* (*S. pyogenes*) が最も多く、次いで *Haemophilus influen-*

zae (*H. influenzae*), *Staphylococcus aureus* (*S. aureus*), *Streptococcus pneumoniae* (*S. pneumoniae*) を多く認めた。この傾向は各年次を通して認められた (Table 1, Fig. 1)。

S. pyogenes, *H. influenzae*, *S. aureus* の薬剤感受性に関しては、*S. pyogenes* はほとんど薬剤耐性を認めずおおむね良好な感受性を示し

Table 1 Result of bacterial analysis

	1989	1993	1995	
<i>S. pyogenes</i>	43	24	44	
<i>H. influenzae</i>	18	17	14	
<i>S. aureus</i>	17	17	11	
<i>S. pneumoniae</i>	19	6	15	
<i>S. agalactiae</i>	9	11	5	
<i>B. catarrhalis</i>	1	1	3	
other streptococci	2	5	20	
other G.N.R.	5	4	2	(株)

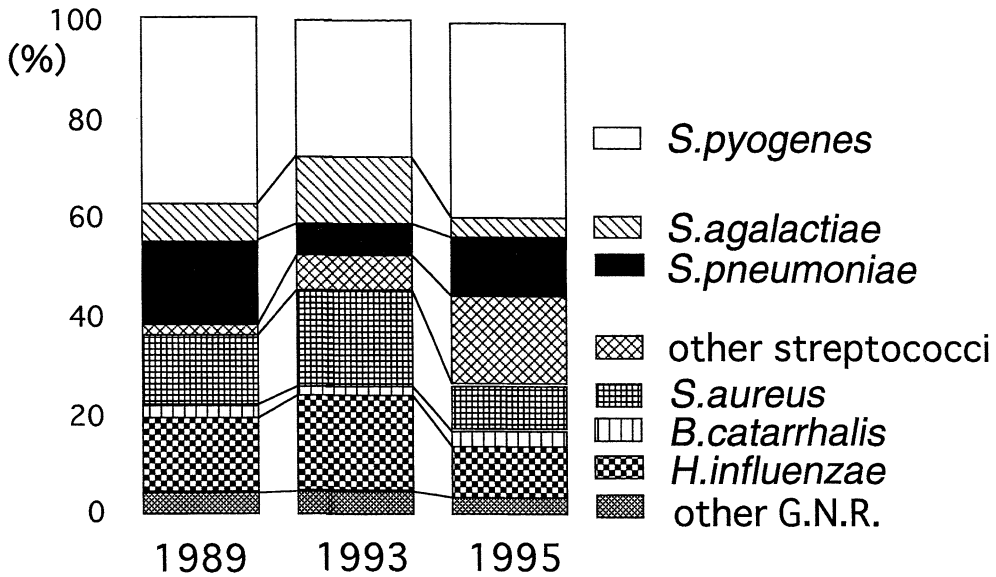


Fig. 1 Result of bacterial analysis

た. *H. influenzae* では、1993年の集計¹⁾では、FOM, ABPC, SBPCの耐性株が多く認められたが、1995年の集計においてはABPCに対する耐性菌を若干みとめるものの比較的良好な感受性を認めた。*S. aureus* では、SBPCへの耐性化が年次ごとに著明になっており、またEM, FOM, MPIPC, CCL, CAZの耐性株も若干認められた。また、MRSAも2例検出された。

S. pneumoniae ではCCLの耐性株が増加した (Fig. 2, 3, 4, 5)。

考 察

従来より急性扁桃炎の原因菌として *S. pyogenes* が注目されている²⁾。今回の調査においても *S. pyogenes* が最も多く検出され、依然として注意が必要と考えられる。薬剤耐性株は少なくおおむね良好な感受性を示すため適切な治療にて除菌が可能と考えられる。*H. influenzae* ではβ-ラクタマーゼ産生株が1989年の集計¹⁾では約11%、1993年の集計¹⁾では35%、1995年の集計では約14%の頻度で認められた。杉田

は約20%にβ-ラクタマーゼ産生株を認める³⁾としており、ニュー経口セフェム系剤の使用を勧めている。ABPCの耐性株もあり今後薬剤の選択に留意する必要がある。*S. aureus* では、SBPCの耐性化が年次ごとに著明になっており、β-ラクタマーゼ産生菌の増加⁴⁾が示唆された。杉田は *S. aureus* の約80%³⁾がβ-ラクタマーゼ産生株であるとしている。*S. pneumoniae* では近年問題となっているペニシリン耐性株⁵⁾⁶⁾の検出に当院ではMPIPCによるディスク検査を施行しており、検出された15株中13株がペニシリン中等度耐性株と判定された。

また各細菌の月別検出率をみると *S. pyogenes* は、3月、6月、11月に多く認め季節の変わり目に増加し、*H. influenzae*、*S. pneumoniae* は春に多い傾向を示し、*S. aureus* は初夏から夏に増加する傾向を示しいずれも有意差を認めた (Fig. 6)。

ま と め

1. 1989年、1993年、1995年に当科を受診し

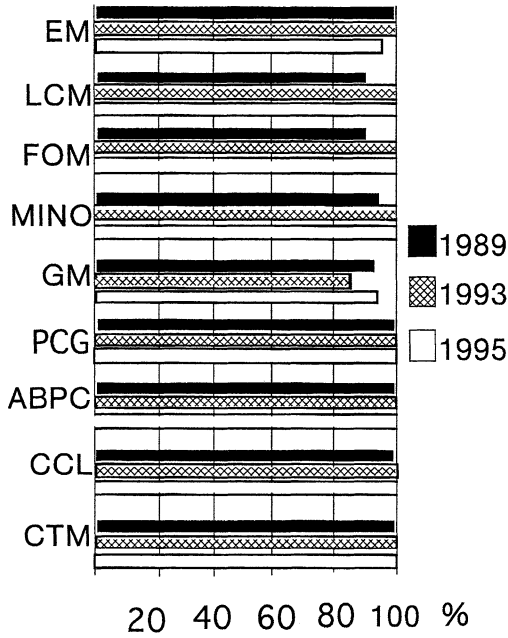


Fig. 2 Sensitivity of *S. pyogenes*

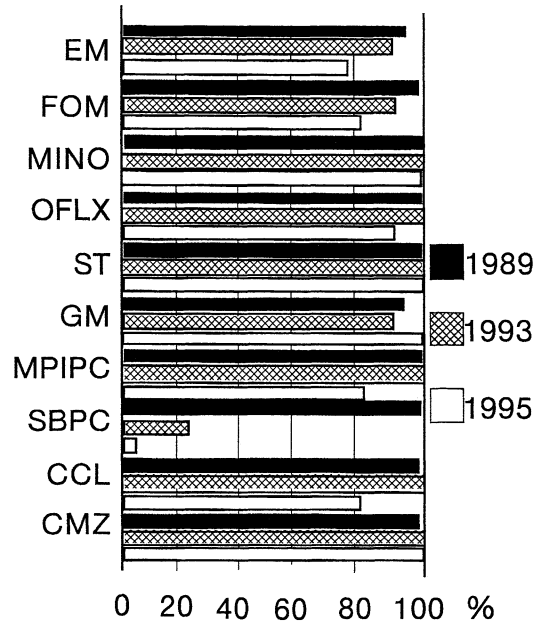


Fig. 4 Sensitivity of *S. aureus*

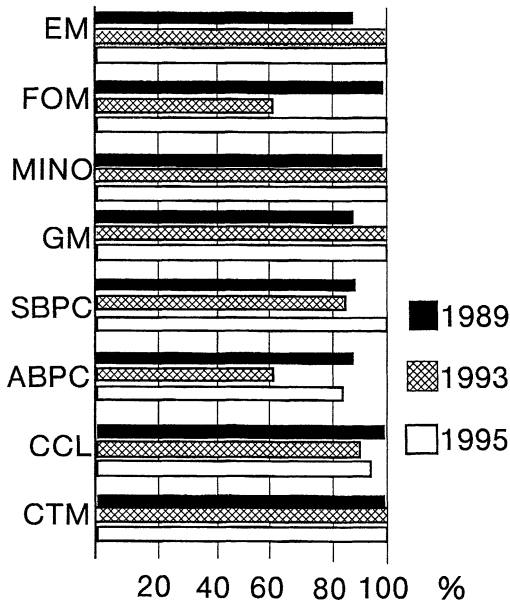


Fig. 3 Sensitivity of *H. influenzae*

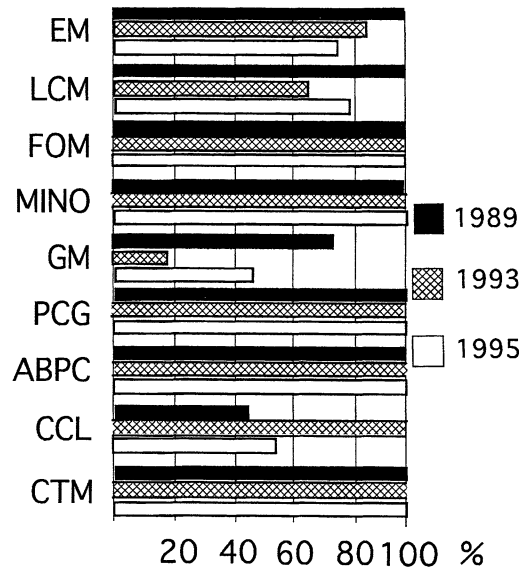


Fig. 5 Sensitivity of *S. pneumoniae*

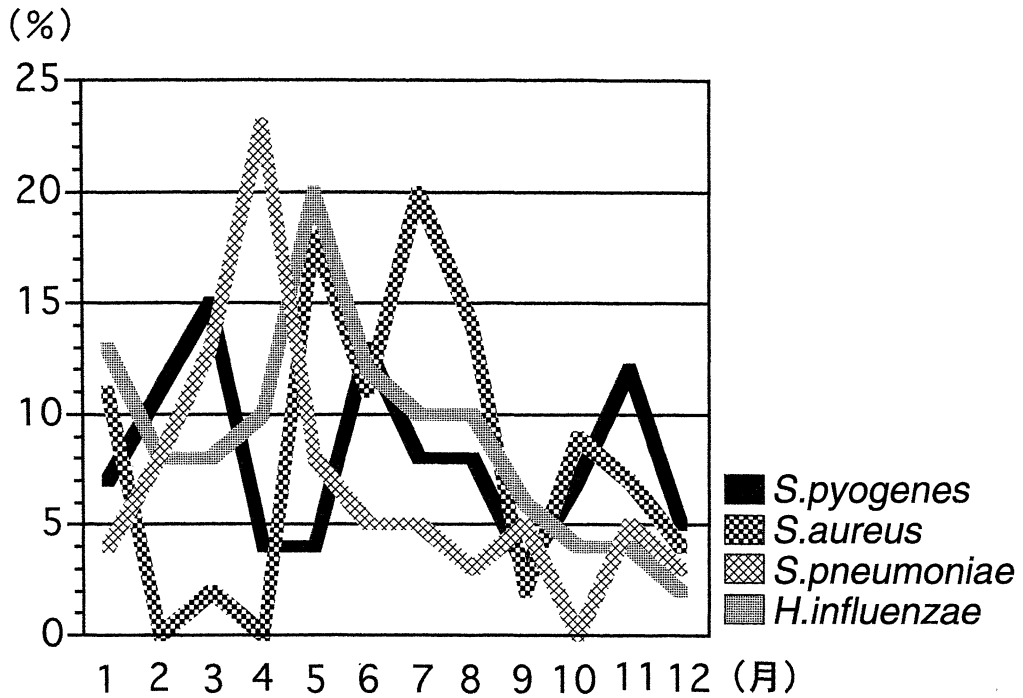


Fig. 6 Seasonal incidence

た急性扁桃炎患者から検出された細菌について検討を加えた。

2. 検出細菌は *S. pyogenes* が最多であった。
3. *S. pyogenes*, *H. influenzae*, においては薬剤感受性は比較的良好であった。
4. *S. aureus* は SBPC に強い耐性を示した。
5. *S. pneumoniae* の多くは, GM, CCL に耐性を示し, ペニシリン中等度耐性菌の増加を認められた。

参 考 文 献

- 1) 岸本 厚ほか: 扁桃炎の臨床細菌学, 口咽科: 7-3, 265-272 1995
- 2) 杉田麟也: 耳鼻咽喉科領域の各種感染症の原因の時代による変遷, 日耳鼻感染症: 11-1, 136-143 1993
- 3) 馬場駿吉, 杉田麟也ほか: 耳鼻咽喉科領域感染症 Q & A: メディカルチャー, 1995
- 4) 小西一夫: 口腔, 咽頭感染症における最近の問題

点, 日耳鼻感染症: 11-1, 153-158 1993

- 5) 杉田麟也: 肺炎球菌の耳鼻科領域感染症 科学療法の領域: 10-4, 71-85 1994
- 6) 猪狩 淳: 新しい耐性菌の動向, クリニカ: 19-3, 12-19 1992

連絡先: 森淳
 〒454 名古屋市中川区尾頭橋 3-6-10
 藤田保健衛生大学第二教育病院耳鼻咽喉科